3年半ぶりに「日卵協同期見学研修会」開催

茨城県の愛鶏園小美玉ファームGPセンターを訪問

120人が参加

（一社）日本卵業協会（米山大介会長）は7月27日、茨城県小美玉市の㈱愛鶏園小美玉ファームGPセンターで「2023年度前期見学研修会」を開いた。見学会の開催は2019年11月以来3年半ぶり。予定をはるかに上回る応募があったことから、参加人数を制限したうえで、全国の会員から約120人が参加。各施設を見学し、活発に情報交換した。

会場となった小美玉ファームは、国内トップクラスの鶏卵の産地として知られ、酪農も盛んな茨城県小美玉市の中央部に立地している。常磐自動車道の石岡小美玉インターチェンジへは車で約15分。首都圏の消費地や鹿島の飼料コンビナートへのアクセスも良い。

敷地の総面積は10万4165平方㍍。2018年1月22日に稼働を開始し、現在は1棟23万羽の成鶏農場4棟と、インラインGPセンター、コンポストセンター（堆肥生産施設）の3施設が完成。鶏卵製品を1日当たり約80万卵（約46㌧）、有機堆肥を同約23㌧生産している。

入場ゲートは、あらかじめ衛生管理区域の外側に配置した従業員用駐車場と、農場入り口、GPセンター入り口の3ルートに分かれており、GPセンターや農場へ入場する車両は、それぞれ動線を交差させずに車両消毒ゲートを通過できるようになっている。

見学会に参加した一行は、バスなどの車両から降りて靴底や手指を消毒したうえで、靴底にビニールカバーを装着して、GPセンターがある建物に入場。お揃いで赤色の特製ポロシャツを着用したスタッフの案内に従って20人前後のグループに分かれ、愛鶏園の歴史を紹介した「インキュベーションルーム」や、ガラス越しにGPセンターと成鶏農場を見学できるコースを巡った。

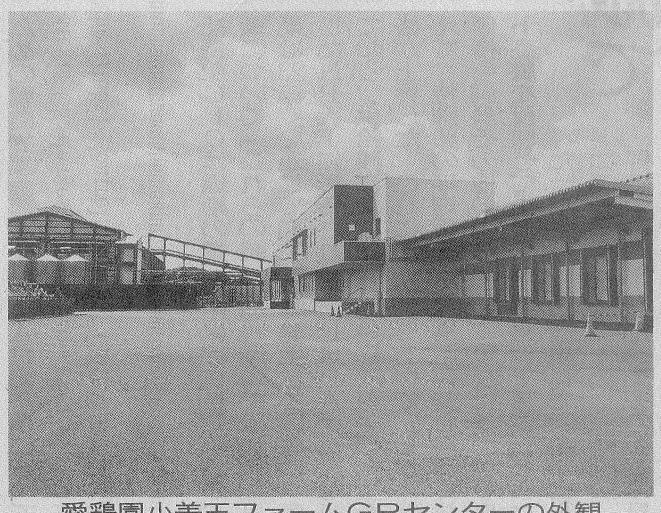
現在は1日当たり110万卵を処理

各施設のうち、成鶏農場には直立12段（4段×3フロア）のファッコ社製エンリッチャブルケージシステムを導入。1棟を2室に区切り、1室11万5000羽×2室×4棟で合計92万羽を飼養している。各鶏舎にはトンネル換気システムやクリーニングパッド、自動除糞システムなども導入し、4棟を12人（1人1日当たり7・5時間）で管理。GPセンターから見て奥側には、さらに4棟分の敷地が用意され、農場の完成時には、鶏舎は全8棟になる。

GPセンターでは、インラインで1日当たり約80万卵（約46㌧）、オフラインで同約30万卵（約18㌧）を処理。インラインの洗卵選別包装ラインにはモバ社の毎時25万2000卵処理能力のシステム、オフラインのリパッカー（トレーからパックに詰め替える装置）にはナベルの毎時3万6000卵処理能力のRTFシリーズが2台入り、さらに共和機械のパック卵総合検査装置を2台導入して、最終製品の品質を確認している。

業務用のダンボール卵（箱玉）の割合は全体の15％ほどで、積み下ろし工程にはファナックの協働ロボットを導入して従業員の負担を軽減。加工メーカーなど向けの液卵用の卵やグレーディングまで終えたいわゆるG卵も、全体の4％ほど生産している。

資材の保管には、トヨタの自動倉庫を採用。責任者を含めて合計23人を雇用し、パートさんが出勤しやすい午前9時から午後3時までの実働5時間で全作業を終わらせている。



愛鶏園小美玉ファームGPセンターの外観

GPセンター側からみた成鶏農場

見学後は参加者全員で記念写真を撮影した

たまごを通して大切な人を幸せにする

見学を終えた一行は、大会議室に集まり、日卵協の小坂裕一専務理事が人数制限や見学会の円滑な進行への協力に謝意を述べたうえで、米山会長があいさつ。

米山大介会長（㈱ホクリヨウ社長）は先代の故米山清一氏が、愛鶏園の齋藤大天会長、齋藤拓社長の祖父で"養鶏の神様"と呼ばれた故齋藤虎松翁から贈られた紙片を、常に財布に入れ、お守りのように大事にしていた逸話を紹介。「そうした虎松さんの精神がいまだに伝わっているこの愛鶏園、本当に立派な農場だと感じた。これから質疑応答や意見交換を活発に行ない、少しでも身につけて帰っていただければ」と述べた。

齋藤大天会長は、新型コロナウイルスなどの影響で見学会の延期が続いたことに触れ、「ようやく今年無事に開催でき、良かったと思う。至らない点も多々あるかと思うが、本日は社長はじめ皆揃っているため、どんどん質問をしてほしい」と述べて一行を歓迎。

齋藤拓社長が、「たまごを通して大切な人を幸せにする」との愛鶏園のブランドビジョンや行動方針、1925年5月5日の創業から98年間の歴史と社訓、種鶏からの一貫飼育や独自の配合飼料設計などの生産面のこだわりについて説明したうえで、出席者からの質問に答えた。

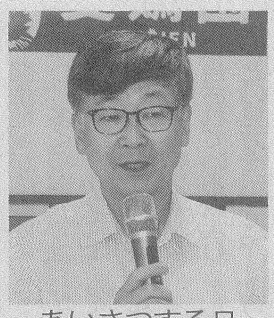
HPAI対策は「まず当たり前のことをやり抜く」

この中で、危機管理（BCP）体制については、GPセンターや農場などの各生産拠点への自家発電機の導入、茨城・埼玉両県の4農場体制による安定供給維持、人材を守るための連絡体制の確認を含めた定期的な訓練などに取り組んでいることを説明。

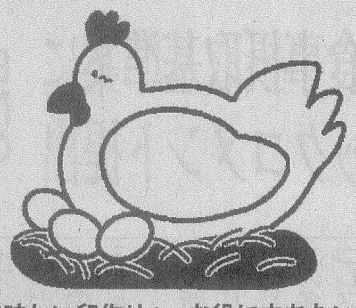
高病原性鳥インフルエンザ（HPAI）対策については「まずは当たり前のことをやり抜く。農場内での着替えや履き替え、手洗いを徹底してやり切るにはどうするか。これを皆で考え、やはり防疫のモチベーションが下がるとウイルスは入ってくる、防疫もちゃんとした仕事なんだとの認識を共有する、ここが一番大切なことと捉えている。次いで設備面の対応では、例えばバーコンベアの入り口を閉じられるシステムを導入するなど、鶏舎の構造上どうしても動物が入りうる箇所をどうふさぐかを考えたり、野鳥が飛来しうる水面は完全にネットで覆うなど、まだ完璧ではないが、夏場の今のうちから、まだ何かできることはないかと日々考えている」と回答した。

齋藤大天会長

齋藤拓社長



日卵協会長　米山大介氏



美味しい卵作りへ、お役に立ちたい！

白石カルシウム株式会社

〒530-0005　大阪市北区中之島 2-2-7
中之島セントラルタワー 9 階
TEL 06-6231-8265　FAX 06-6231-8306
http://www.shiraishi.co.jp